

あなたは死を宣告されたことはありますか？ 先々月号、先月号の続きで、前回までのあらましはこうだ。

2002年11月から翌年7月まで、中国広東省で急速に呼吸障害を示すSARSが発生するなか、アメリカの砂漠地帯に出かけた。帰国前日から咳、熱、だるさが現れ、ホウノテイで成田に到着。飛行場の医務室で診療を受けるが「風邪でしょ」と診断され、北海道の自宅に帰る。その後、9月に人間ドックを受け、右肺全体に影があると言われ、専門医を受診した。03年10月21日、札幌市南1条病院（現在の南3条病院）の診察室で「現在のこの状況は5年で50%、10年で10%の生存率です」と告げられ、私はただ驚くだけだった。

翌11月21日に口から器具を挿入され、直接右肺にブスブスと差し込まれ生体検査を受けた。結局ガンではなかったが、では何なんだ？ということになった。可能性としては、過去にアメリカで200名以上の死者を出しているコクシ、現地の通称バレーファイバー（溪谷熱）が疑われ、CT画像を持ってアメリカで検査をするように勧められたのだ。

肺の影は「コクシ」が原因

04年1月30日、予約なしにカル

フォルニア州の砂漠にあるヤカバレーのヤカ・オムニクリニックに行った。まず日本と同じく窓口で事前に問診票に記入する。

アメリカのほかの病院でも経験したが、この問診票は何回も何回もコピーされ、Aと書いてあるのかBなのかの判定も難しい。筆記用具の鉛筆も日本よりも細くて、あと100字書いたら使えなくなるくらいの長さだ。それも先っぽの黒鉛部分が少ししか出ていないので、自分で周りの木の部分をめくることがある。アメリカの筆記用具といえば、クロスやシェーファーが有名なのに、なんでこんなところでケチるのかわからない。

事前に、肺は「Lungs」、腫瘍は「tumor」、炎症は「Inflammation」などと英語を調べておいたので何とか記入することができた。性別（sex）欄には「once a week（ほぼウソ）」と記入した。待合室でボケーと待っていると男性看護師がテキパキ動いていた。金髪・ブルーアイだったが、同僚と話している言葉は……

死の宣告をされたことがありますか？(3)

Vol.144



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作物にする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョシディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

メキシカンだった。そんなんです、カルフォルニアで働くには普通にメキシカンが話せないと一人前扱いされないこともあるそう。

10分もすると、白衣を着たヨボヨボの医師が私の名前を呼んでいた。札幌から持ってきたCT画像を渡すが、黙って見ているだけだった。そこで私のほうから「札幌の担当医はこの3cmの炎症は肺がんではないと言っています」と伝えた。

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

すると現地の医師は「日本の医師が肺がんではない、と言うのだからそうなのであろう」と言った。私が「症状からバレーフィーバー（溪谷熱）の可能性はありますか？」と聞いたところで、じゃー血液検査をやりませんかとなった。私の御清きAB+型の血液を抜いたのは先ほどの男性金髪・ブルーアイ野郎だった。確か3本くらい抜かれただろうか。

検査結果が出るまでに1週間くらい必要とのこと。その間、北海道よりも寒いファアゴで軽く商談し、その後ケンタッキー州のレイビルのファーム・シヨウに行つた。2週間経つた2月13日、金曜日早朝にレイビルを立ち、ミネアポリス経由で3時間の時差ぼけを耐え、午後2時に先ほどのカルフォルニアの砂漠にあるクリニックに血液検査の結果報告を受け取るようになった。

その結果報告書を私に見せながら医師は「バレーフィーバーの抗体あるね。2つの検査でそうなっているよ」と告げた。私は、あーやっぱりね、と思つた。続けて「この後はどうすれば良いですか？」と尋ねた。医師の答えは「何もない」。再度確認したが、答えは同じだった。つまり抗体ができて、今は何の症状もないのだから薬も、治療もな

し。確か前回の血液検査と今回の結果報告で250ドルくらいの支払いになったと記憶する。

翌日はとりあえず全快祝いだ！ということで、LAチャイナタウンの一番東側にある有名飯店フルハウスの宴会をすることになった。このフルハウスは味、質、価格が満点なのにトイレはいつも水浸しだが、毎回行く馴染みの店になってしまった。

いくつまで生きれば良いんだ？

北海道に帰り、血液検査の報告書を札幌南1条病院の医師に渡した。医師からは「そうか、そうか、でも切りたいよね」と言われた。実はアメリカから帰つてからPET検査も受けた。がん細胞は正常細胞よりも多くのブドウ糖を取り込む。PET検査は、その性質を利用して、ブドウ糖を体内に入れてから放射線を当てて全身の画像を見ることになる。今では人間ドックで10万円台とお安く(?)できるようなつたが、なんとその当時は15万円ほどした。私が行く病院では02年くらいからPET検査が可能になり、ありがたいことに保険適応で診て頂けることになっていった。

医師はCT画像やPET検査の結果を見て「やっぱり切りたくないね、

普通なら切るよね」と怖い言葉を発した。なんでも右肺は3つ、左肺は2つに分かれていて、その一カ所に小さな腫瘍があれば、その1つ全部を切除することになるようだ。ガンのなかでも最も脳転移が多いのが肺がんらしい。脳に転移すると寿命は……。そこでPET検査には脳のMRI検査も必要で、別途数万円かかることになる。幸いなことに5年近く保険でPET検査を受けることができ、出費は数万で毎年全身を診てくれることになった。

その後、担当医師から「この炎症は明らかに大きくならないね。来年から保険でPET検査はできないから」と残酷な答えがあった。さらに5年くらい経つと、担当医師からは「この炎症なんか小さくなつてるね」と言われ現在に至っている。

肺がんの原因の一つにタバコがある。ただ90歳近くまでタバコを吸っていた近所の人を知っている。同じ病院にかかり、亡くなる数年前までタバコを吸っていたので「あれ、おじさん、肺がんだったんじゃないの?」と聞いたら、「いくつまで生きれば良いんだ?」と返ってきた。

この人は戦争中に旭川の陸軍基地にいて、当時の戦争話をいろいろ聞かせて頂き学んだ。人はただ強ければ勝ち抜くわけでもなく、

運だけで生死が分かれるわけではなく、生き残ったことには理由があるのだらうと考えさせられた。

ヒューヒュー言いながら、なんだかんだで今も生きている。04年10月には長沼で遺伝子組み換え大豆をやりたいと発表。多くのメディアがやって来て、私の言葉をつまみ食いして活字や画像を切り貼りして放送した。地元からは非難の嵐。「責任とれるのか!」「死んだらどうする!」「次の世代に悪影響がある!」など当時の内閣府食品安全委員会の発表とは相反する言葉を浴びせられた。ある人から「よく耐えられますね」と言われた。当たり前だ、科学が既存の作物と安全性の同等性を担保している。もう一つは一度、死を選択された身だ、手前等(てめいら)ごときの戦後70年経つてもアングロ・サクソンとの闘い方も知らないで、エイエイ我こそは大和の国

〇〇の土族たる〇〇だ!と叫ぶことは先の大戦で亡くなった方たちに恥ずかしいと思わないのだろうか。

今こそアングロ・サクソンの新本流アメリカから学ぶ時だ。所詮オタツでも5インチ野郎のアジアの南文化圏の言葉で殺されてたまるか、このボケ、カス!と肺の奥深くで吠えていた。